

して機能している点の強調にある。

コノリーの思想はラディカルであるが故に、理想論と言わざるを得ない点も多い。さらに、今日は、ポスト・ポストモダンと言われ、大きな物語が終焉し、いや、むしろ、すべてが言語ゲームにすぎないと了解されたからこそ、人々が物語に安住しようとする、いわば右傾化（ナショナリズム化）の様相を見せている時代である。

しかし、そうであるからこそコノリーの議論は今も尚重要であり、プルーリズムの観点からの宗教／宗教施設の役割の分析は、宗教研究においても意義を持つものである。

多元主義の社会的文脈における作用実態と将来への展望

渡辺 光一

教団に所属する（信仰者）かしない（非信仰者）か、宗教への関与が相対的に強い弱い、という二つの軸から四つの象限を考えると、宗教学者の主たる関心は、①教団に所属する強い関与者（「立派な信仰者」）に向けられてきたが、近年では②教団に所属しない強い関与者（いわゆる「スピリチュアリティ」）や③教団に所属しない弱い関与者（いわゆる「無自覚の宗教性」）にも向けられている。しかし、④教団に所属する弱い関与者（「緩い信仰者」）にはほとんど関心が向けられず、肯定的な評価もなされなかった。一方、教団に所属する信仰者について、他宗教に対して寛容のか非寛容のかという軸を追加して四つの象限を考えると、宗教学者の考える理想は、強い信仰を持ちながら他宗教の内容と価値も理解する多元主義的で寛容

的な信仰者であり、それこそが「真に立派な信仰者」と見做され、宗教間対話などの動機となってきた。これは、「強い多元主義」と同様の観点から、「他者の信仰を学ぶことで他者との差異を通じて自分自身の信仰を深めることができる」という論理で補強されることもある。しかし、様々な宗教を学べば学ばほど宗教間の教義的な共約不可能性をより認識するのだから、本来は学ぶことは何の解決にもならないはずである。このような懸念に関しては、「真理（真実在）」を会得すればそれが根本において同一であることが自覚できる」という反論もあるだろう。しかし、真理（真実在）を会得しその根本的同一性を理解したから寛容になったのか、寛容になったふりをしているだけなのか問題である。教義的な共約不可能性を解消できるほどに真実在を会得することは、常人の域を超えているはずである。仮に、真理（真実在）を会得し根本的同一性を理解した人がいるとしても、そのような「真に立派な信仰者」はごく例外と考えたほうが自然ではないだろうか。自称多元主義者の多くは真実在の根本的同一性を理解したと錯覚し、疑似的寛容性を示しているだけかもしれない。もしそうであるならば、彼らの信仰の強さ自体が錯覚に基づく欺瞞である可能性もあり、「スピリチュアリティ」もまた同様であるかもしれない。単純に考えても、関与と寛容性は逆相関にあるだろうから、「強い多元主義」の現実味は疑わしく、好事家の理想的願望に基づく単なる虚構に過ぎない可能性もある。

筆者らの行なってきたいくつかの社会実験は、そのような可能性を示唆するものである。実験計画的に合成された宗教的体

験談を評価させる社会実験を日米で行なったところ、回答者の多くは宗教的体験談を受け入れるかどうかについて、自分の宗教的信念と整合する一貫した判断を下すことはできず、社会的文脈に左右された非一貫的な判断をしており、多元主義者であるからといってその非一貫的判断の傾向に差はなかった。社会的文脈にかかわりない一貫性を示したのは、自分の信念に反対するものを一貫して拒絶する排他主義者だけであった。このことは「強い多元主義」という理想像が虚構に過ぎない可能性を補強している。また、その後の日本での社会調査では、信仰者が「神がいる」と考えている理由としては、「自分の心が豊かになった経験があるから」「危ない場面で助かった経験があるから」という曖昧な個人的経験によるものが主流であり、「真実在」についての存在論的な信念はごく少数である。信仰者の多くは宗教的真理(神など)についての存在論的な質問に「分からない」と答え、不可知論的なスタンスをとっている。このような「緩い信仰者」は決して「無自覚」ではない専心性を持つが、非寛容になる必然性も低い。逆に、「強い信仰者」や「スピリチュアリティ」のほうが非寛容的な傾向が強かった。従来看過されてきた「緩い信仰者」にこそ、明日の宗教の現実的で建設的な希望があるかもしれない。

宗教研究におけるライフストーリーの方法論的意義について

宮本要太郎

発表者は現在、「無縁社会」において宗教はいったい何をなしているのか、この状況の克服に向けて実際にどのような活動が

なされつつあるのか、またその実態を宗教学的にどのようなとらえればよいのかなどを明らかにするため、主として「釜ヶ崎」をフィールドとして、一般市民の生活空間から排除された人々に寄り添い、連帯し、共生しようと地道に活動が続ける宗教者たちを対象に、もっぱら聞き取りを中心とした調査研究を進めている。

そこで注目したのが、社会学や人類学などで広く使われているライフストーリーのアプローチである。このアプローチを採ること、支援活動に従事する宗教者たちへの聞き取り調査を通じて彼ら／彼女らのライフストーリーを描き出し、その解釈を通じて諸個人の活動がソーシャル・キャピタルとしての生きた働きを表していくアクティヴな文脈を、歴史的・社会的な文脈と交わらせながら、トータルに論じることができると考えた。

しかし、実際に各人の生活史を聞き取ろうとすると、容易でないことがすぐに分かる。ライフストーリーは、個人の「主観」や「解釈」を尊重する点で、「人間中心アプローチ」ともみなされるが、この点で、宗教社会学の分野でこれまで議論されてきた「内在的理解」や「共感的データッチメント」の考え方は大いに参考になる。もっとも、宗教社会学的な問題設定と異なり、本研究が対象としている人々の活動は、しばしば信仰と葛藤を生じさせたり、時には信仰を相対化するものであって、時系列的な編集を経て一貫性のある「生活史」としての「記録」を作成するためには、聞き取りデータのかなりの蓄積が必要である。